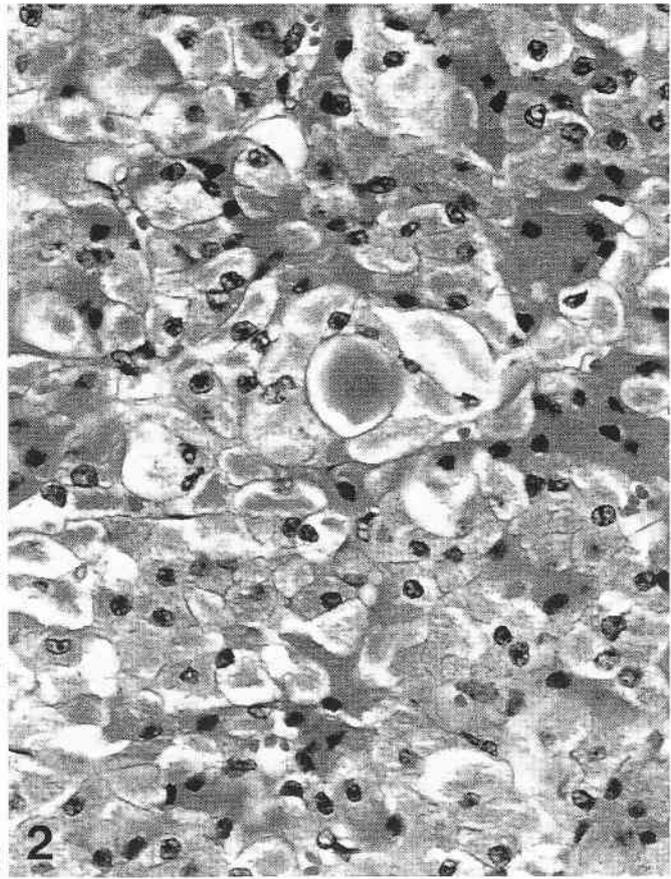


## ウシの外 (第三) 上皮小体

酪農学園大学出題 第 41 回獣医病理学研修会標本 No. 795



動物：ウシ，ホルスタイン種，雄，1985年7月12日生。

臨床事項：本種雄牛は7年前にアメリカより輸入されたが，導入時より勃起はするものの偽牝台で射精することは一度もなく，常に電気刺激により精液の採取が行われていた。最近になり精液の採取量も少なくなったことから病理解剖の依頼があり，2000年5月24日に安楽殺された。

剖検診断および所見：1. 安楽殺 (体重 1050 kg)，2. 肝右葉腹側に  $4 \times 4 \times 10$  cm 大の限界明瞭なる類白色髓様結節 1 個および左葉の萎縮，3. 副腎髓質の過形成ならびに皮質領域の萎縮，4. 多発性甲状腺嚢胞，5. 両腎盂に小豆大結石数個，であり外 (第三) 上皮小体は大豆大であったが肉眼的に著変は見出せなかった。

組織学的所見：薄い線維性結合組織に覆われ，腫大した好酸性細胞からなる結節性の細胞集塊が上皮小体辺縁にあるとともに，線維性結合組織に覆われることなく実質内にも数個存在する (写真 1,  $\times 42$ )。

さらに立方状の上皮に覆われる嚢胞形成があり，嚢胞内に好酸性に染まる液状物質を満たしている (写真 2,  $\times 420$ )。この嚢胞は実質内にも存在する。この他の多くの主細胞の核は腫脹し，核内のクロマチンと核仁を欠く核壁が濃染する。実質外には胸腺の遺残と思われるリンパ球集簇がある。

考察：実質内の好酸性細胞集簇塊は結合組織に覆われておらず，両側性に病変が存在することから，腺腫というよりは過形成の性格を有している。病巣での嚢胞形成は，実質周囲に胸腺遺残と思われるリンパ球集簇があることから，鰓後体遺残物に起因している可能性もある。上皮小体病変を含め全身諸々での過形成病変は加齢による変化と解される。

診断：好酸性細胞からなる多巣状性過形成 (Multifocal oxyphil cell hyperplasia, parathyroid gland)